

カラー版 古典の花

奥の細道

野ざらし紀行の花

文／松田 修



あとがきにかえて

カラー版『古典の花シリーズ』も、この巻をもって完結することになった。とりあげた古典は、物語・和歌・随筆・紀行と内容はそれぞれに異なるが、いずれも優れた作品で、尊い日本の文化遺産といわなければならない。これらの作品については、国文学などの立場から、立派な研究がなされているが、日本の古典は広く各分野からの研究が寄せられてこそ、いっそう古典としての光を放つのではないだろうか。

私は、植物文化史の面から日本の古典に興味をもち、これまで『万葉集』をはじめいくつかの古典を対象に著作を発表しているが、こんどのように、日本の代表的古典を一貫してとりあげたのは初めてである。喜びこれにすぐるものはなく、この上は、このシリーズが世の古典愛読者のよき伴侶になればと、それをひたすら祈る次第である。

私は、いつかこのような仕事を成し遂げたいと、日頃から願っていたのであるが、ここに国際情報社のご支援を得て、その願いを達することが出来たのはまことに幸いというほかはない。それを感謝するとともに、二年にわたるこの面倒な仕事に、終始、私と一体となつて努力して下さった同社編集部の木花茂雄、大東悠子両氏に対し、深く感謝の意を表しておきたい。

昭和五十八年四月 松田 修

カラー版 古典の花

奥の細道 野ざらの花

昭和五十八年五月一日発行

著者 松田 修 ©

発行人 石原明太郎

発行所 (株)国際情報社

発売元 (有)光書房

〒150 東京都渋谷区東一―二八―六

電話〇三(四〇七)六一四六

振替 東京五一三六五四八

印刷所 (株)国光印刷

定価 一六〇〇円

© OSAMU MATSUDA

1983

printed in Japan

ISBN4-89322-149-3

いたします。

カラー版 古典の花

奥の細道野ざらし紀行の花

文・松田 修

国際情報社

カラー版 古典の花

奥の細道 野ざらし紀行 の花

目次



立石寺の芭蕉像

草木類の部

あさがほ

6

あし

8

へちま

11

いね

11

いも

15

うり

28

しだ

28

すげ

29

こけ

30

すすき

34

ばせを

46

ゆふがほ

48

よもぎ

49

べにばな

51

はなかつみ

54

木本・竹笹類の部

けいとう	16	すみれ	37	なでしこ	55
きく	18	なのはな	38	むぎ	56
けし	22	はぎ	40	らん	58
けんさう	24	ははきぎ	42	あやめ	60
しのぶぐさ	26	なすび	42		

あせび	62	たけ	82	ねぶ	98
いばら	65	ちや	84	ふゆぼたん	101
うのはな	65	つた	87	まつ	101
うめ	70	しの	88	ぼたん	105
かし	72	ささ	88	やなぎ	105
くり	77	つつじ	93	もみぢ	109
さくら	77	もも	94	むくげ	111
すぎ	81	ふぢ	96	とち	112

《奥の細道の風土》 那谷寺境内……20 緑したたる立
石寺……32 俱利伽羅峠の古道……44 観世寺境内の鬼
の岩屋……52 白河の関跡付近の雪景色……68 雪に埋
もれる尿前の関跡……74 月山の遠望……90

芭蕉の植物名句鑑賞

奥の細道・野ざらし紀行の植物

奥の細道旧蹟ガイド

索引

114 130 136 142

はじめに

松尾芭蕉の芸術は、旅で完成されたものといい、その紀行文の一つが、この巻にとりあげる『奥の細道』であり、『野ざらし紀行』（甲子吟行）である。『奥の細道』はいうまでもなく、芭蕉の人間観と芸術観のいっさいが凝縮している作品であり、『野ざらし紀行』はまた、芭蕉の紀行文の最初のものとして知られる。芭蕉の紀行文は今日も多くの人々に愛読され、芸術的にも高く評価されているものであるが、私はここに、この二つの紀行文を選んで植物面から考察してみようと思う。それは、芭蕉が『笈の小文』に、「風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処、花にあらずといふ事なし」といつているごとく、自然の懷に抱かれて、その真実に徹することを命とした彼の風雅の心が、植物の上にも顕著に現れていると感じられたからである。なお、参考のために、広く芭蕉の句の中から植物をよんだ名作をひろって巻末にまとめてみたので、ご覧いただきたい。執筆にあたり、岩波書店版の日本古典文学大系『芭蕉文集』（杉浦正一郎・宮本三郎・荻野清校注）、同じく『芭蕉句集』（大谷篤蔵・中村俊定校注）を底本として使わせていただいたので、最後に一言おことわりしておく。

おのれをいかにしんがらう

世にせむる元祐朝

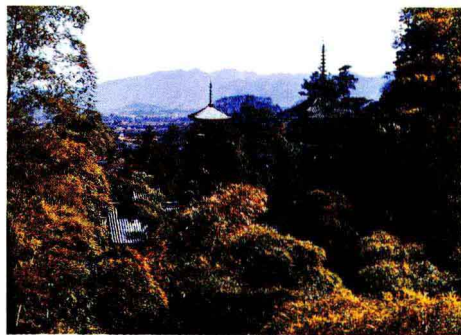
あさがほ

朝顔

アサガオ(ひるがお科)

〔野ざらし紀行〕

二上山当麻寺に詣て、庭上の松をみるに、凡千とせもへたるならん。太いさ牛をかくすともいふべけん。かれ非情といへども、仏縁にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたるぞ幸にしてたつとし。
僧朝顔幾死かへる法の松



奈良の当麻寺風景

野ざらし紀行のこの句は、当麻寺の僧は今まで幾代となく死に代り、また庭の隅に咲いている朝顔も、毎年枯れてはまた生え代ってきたのであろうが、この老松のみは仏縁に引かれたとみえて、切られることもなく、長寿を保っていることよ、幸せなことだといった意。

当麻寺は、中将姫が蓮糸で織ったという曼荼羅があることで有名である。またこの句の中にある「法の松」については、「まつ」の項を参照されたい。

アサガオは、もと熱帯アジアの産で、日本へは中国を経て平安時代の初期に渡来した。初めは薬用(下剤)を主としたものであったが、花が美しいのでいつしか観賞花となり、平安時代には貴族の館の庭などに植えられるようになった。

しかし、この花が観賞用として広く栽培されるのは、江戸時代以降のことで、当時の俳人達は、朝早く開花し、日中には凋んでしまうこの花のあわれさを、

朝顔や夢の浮橋かけ渡し

北枝

朝顔もこんと咲けり明の鐘

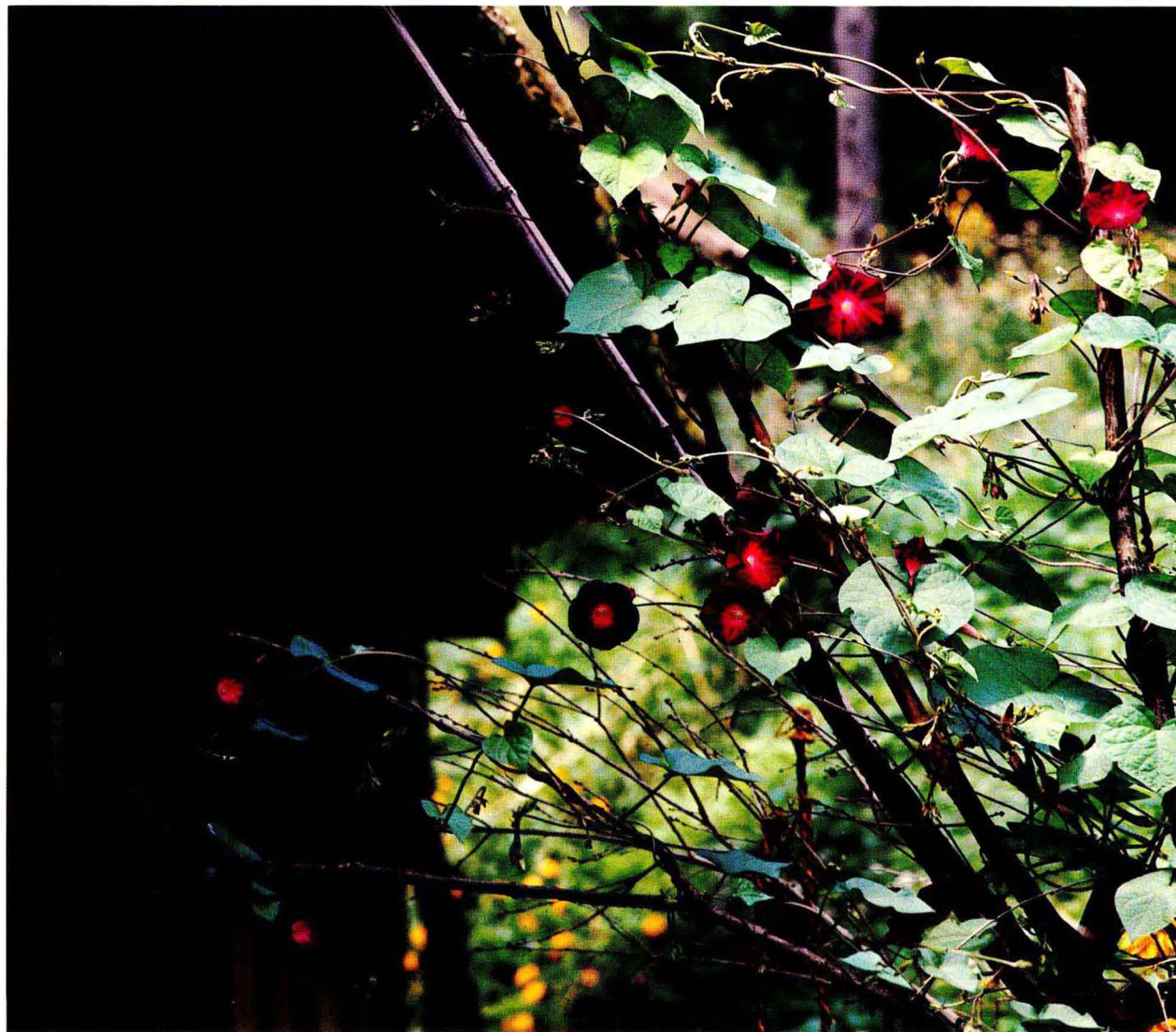
也有

朝顔に釣瓶とられてもらい水

千代女

などとおもしろく句に作った。





あさかほ

あし 蘆

アシ(いね科)

奥の細道のこの一文には、フジ、アシ、ワセ(イネ)の三種の植物が現れている。

主題のアシは「蘆の一夜の宿」と出ているもので、「蘆の」は「一夜」の序詞として用いられている。アシの節と節との間を、「一節」というところから、「一夜」に音が通じる。そこから、これを一夜の序詞としたのである。

アシは河岸、沼などの水湿地に主に生える大形の多年草で、外形はススキに似て群落を作る。昔は、この茎を刈りとって簾などを作った。秋に茎の先に大形の円錐花序を出して、紫色の花穂を作る。このアシが水辺に群生し、川面に風が吹き渡るたびに、淋しい葉ずれの音をたて、いつせいになびく姿は真に秋の景というべきで、俳句ではアシの花は秋の季題となっている。このアシの花をよんだ句に、

蘆の穂や兒撫で揚ぐる夢ごころ

丈草

蘆の穂や招く哀れより散るあはれ

路通

があり、春の芽立「アシ角」は春の季題となり、

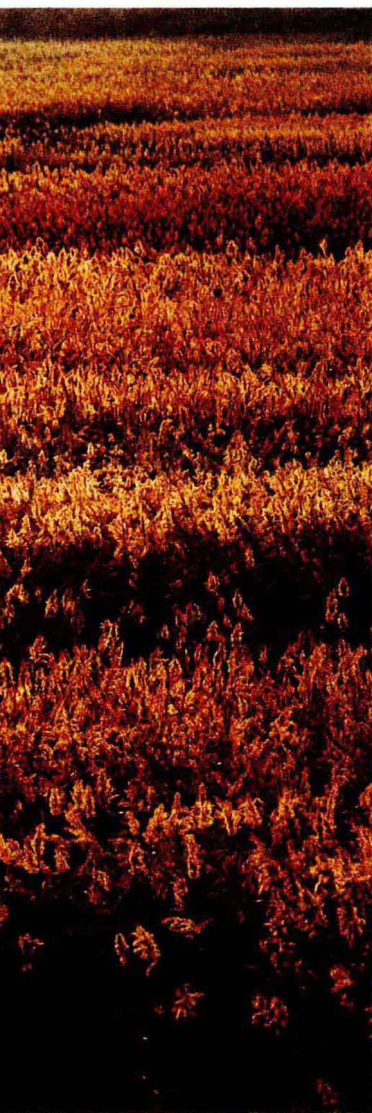
見え初めて夕汐みちぬ芦の角

太祇

〔奥の細道〕

くろべ四十八が瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋れば、「是より五里いそ伝ひして、むかふの山陰にいり、蜃の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ」といひをどされて、かゝの国に入。

わせの香や分入右は有磯海









へちま 糸瓜

へちま(うり科)

奥の細道の一文は「ゆふがほ」の項を参照されたい。

へちまは、もと熱帯アジアの原産といわれ、中国へは宋の時代に南方から伝わったといわれる。わが国へは江戸時代の初めに渡来し、主として本州中部以南の地に栽培され、江戸時代には、浜松、袋井地方、山城の深草、摂州の住吉などがこの名産地であったことが、物の本にある。栽植される一年生の蔓草で、巻ひげがあり、他にまつわり長くのびる。花は夏から秋にかけて咲き、花色は黄色である。果実は緑色の長大な円筒形で、若いものは食用とし、成熟したものはこれを乾かし、たわしなどいろいろの用途に利用する。昔はこの茎を地上三〇センチ位の所で切断し、あふれでる液を集めて化粧水とした。長楕円形のへちまが、へちま棚からぶら下がっているのもおもしろく、句にも、

秋風に吹かれ次第の絲瓜かな

浪化

関の戸にほのぼの見ゆる糸瓜かな

巢兆

などというのがある。

いね 稲

イネ(いね科)

奥の細道の第一の句は、広漠たる早稲田の中を歩いて行くと、右手には有磯海が見下ろされるといった意。有磯海は地名であるが、ここに浪の荒い海の意も含ませて、日本海の特徴を彷彿とさせる。また「分入右は有磯海」と、大きく足を

〔奥の細道〕

福井は三里計なれば、夕飯した、めて出るに、たそがれの路たどくし。爰に等哉と云古き隠士有。いづれの年にか江戸に來りて子を尋。逢十とせ余り也。いかに老さらばひて有にや、將死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命してそこそこ教ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕貞・へちまのはえか、りて、鶴頭・は、木々に戸ばそをかくす。

〔奥の細道〕

くろべ四十八が瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出、増龍の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋れば、「是より五里いそ伝ひして、むかふの山陰にいたり、蟹の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ」といひをどされて、かゝの国に入。

わせの香や分入石は有磯海

あくれば、しのぶもぢ摺の石を尋て忍ぶのさに行。遙山陰の小里に、石半土に埋てあり。里の童部の来りて教ける、

「昔は此山の上に侍しを、往來の人の麦草をあらして此石を試侍をにくみて、此谷につき落せば、石の面下ぎまにふしたり」と云。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

踏み出すような高い調子を出しているのは、これから、大國加賀に入ろうとする心の気負いを出しているのであろう。

第二の句で、早苗とあるのはいうまでもなくイネのこと、この句は、昔の風流なしのぶ摺はみられないが、おりからの田植風景に、あの早乙女が早苗をとる手つきをみると、ああいう手つきをしてしのぶ摺をしたものであらうと、昔が懐しく偲ばれるといった意である。

「しのぶもぢ摺の石」というのは、昔陸奥の信夫郡から産出した摺衣を摺るのに用いたという石で、石に布をあてて、草液でもじれ乱れた模様を摺り出した石をいう。また「しのぶ」は信夫郡の信夫を指し、シノブグサとは関係がない。

イネは、いうまでもなく五穀の一つである。俳句では春の季題に早苗があるし、秋の季題には、

世の中の命あつめて稲の花

美はしき稲の穂並の朝日かな

風流も先づこれからぞ稲の花

などがある。

召波

路通

関更







〔野ざらし紀行〕

西行谷のふもとに流あり。をんなども

の芋あらふをみるに、

いもあらふ女西行ならば歌よまん

野ざらし紀行のこの一句によまれている「西行谷」とは、伊勢の神路山（かみじやま）の南方にある谷で、西行法師の隠栖の跡。この谷の麓を流れる小川でイモを洗う女をみて、私がもし西行だったら、西行が江口の遊女に対したように、歌をよみかけるだろうという意の句である。これは、西行著といわれている『撰集抄』を想い浮べての句であらうという。『撰集抄』によると、西行がある日江口（大阪市淀川の一渡船場で、中古末から鎌倉初期にかけて遊里があり繁昌していた。その遊女を称して江口の君といった）を通り過ぎる時、雨に遭い、ここの遊女の家で一夜の宿を乞うたが、許されなかったので「世の中を厭ふまでこそ難からめ 仮りの宿りを惜しむ君かな」とよんだところ、遊女の妙（たぎ）という者が、「世をいとふ人とし聞けば仮りのやどに 心留むなと思ふばかりぞ」と歌って返した。西行は大いに感心し、強いて一夜を乞い、終夜閑談して別れたという。謡曲の『江口』は、この話を基にして作られたものという。

イモ、ウモというのは、サトイモの古名で、『本草綱目啓蒙』にも、「芋 イエツイモ（和名抄） シロミグサ（古歌） ツユトリグサ（同上） イモ」とある。このサトイモは、もと熱帯アジア産といわれているが、日本へは古く渡来したものらしく『万葉集』にもこの名がみえている。栽培される重要な作物の一つで、球茎を食用とし、「芋名月」のイモとしても知られ、句にも、

名月やあるじをとへば芋掘りに

蕪村

芋を煮る鍋の中まで月夜かな

許六

とよまれている。またサトイモに、ツユトリグサの名があるのは、昔七夕の早旦、このイモの葉の露をとって硯の水とし、これで七夕の歌を書いたところからついたものである。